

東日本大震災発生から 11 年目に寄せて

(今と未来の命を大切にするために)

村田高校校長

平成 23 年 3 月 11 日に発生した「東日本大震災」による津波の影響により、宮城県では 10,568 名の方が亡くなり、未だ 1,215 名(令和 3 年 10 月 31 日現在)の方々が行方不明となる未曾有の大災害から、11 年の年月が流れました。

生徒の皆さんは、地震発生時は小さかったこともあり、記憶が薄れてきているかもしれません。そもそも、人の記憶というものは、残念ながら段々と薄れてしまうものです。

しかし、記憶が薄くなっていいものと、そうでないものがあり、その後者にあたるものは、東日本大震災をはじめ人の命に関わることであります。

本校の生徒・教職員を含めて、今を生きる私たちは、次の世代の人たちが、地震や津波によってその命を失わぬように、被害の悲惨さと避難方法等を伝えていかなければなりません。それは、この被害が発生したこの時代に生きた者としての責務であると考えています。

そのためには、私たち一人ひとりが少なくとも、家庭内での伝承者となり、語り部となることが大切です。その小さな行いは、少しずつ広がり、やがて沢山の人の命を救うことに繋がるものと信じます。

私は、昨年 10 月に石巻の「みやぎ東日本大震災津波伝承館」を尋ねた際、震災後から石巻市の保育所で支援公演等を行ってきた「トンおじさん」こと東馬場亮次さんのパネルシアターを拝見する機会を得ました。内容は、石巻門脇保育所での震災発生時の対応と 1854 年に発生した安政南海地震津波時の「稲むらの火」の公演でした。その語り口は優しくも感情がこもっており、子供から大人までわかりやすいように構成されていました。観客には震災当時石巻門脇保育所で勤務されていた先生方や一般の方々があり、私も公演を聴いていると当時の状況が目の前に映し出される感じがして、胸が熱くなりました。

「トンおじさん」ご自身も兵庫県明石市出身で阪神淡路大震災において被災されており、震災の被害を後世に残して、未来の地域住民が 1 人も命を落とすことがないようにとの願いを込めて、そのような活動に取り組んでおられます。

私たちも、「東日本大震災」の記憶を風化させぬように、一人ひとりが伝承者となる必要があります。

我々は、災害に対して知識と知恵を持って命を守ることができます。そのためには平素から未来に向けて防災の意識を各自が高めておく必要があります。「今は大丈夫だから」という考えを、「仮にこうなった場合はどうする？」という予想を立て、対策を講じておくことが、自分の命は勿論のこと、家族や大切な人の命を守ることにつながります。それを少なくとも家庭内で共有することが大切です。

もし、普段防災の話をする機会が無いのであれば、是非、今日 3 月 11 日には東日本大震災のことについて家族と話をする機会を持ってください。そして、将来の大切な命を守るために「防災に関する話」をしてみてください。

学校としても、引き続き、学校教育の中で「防災教育」についてさらに取り組み、地震・津波をはじめとした、各種自然災害を自分事として感じ、理解して、その対策がとれるように、生徒の皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

今と未来の命を大切にするために。